



トップ 愛知 岐阜 三重 特集・連載 紙面を見る 投稿

社会

「日本のためになる」と信じて強行出場した1963年の「ガネフォ」 元水球選手らが後世に伝える記念誌制作

2025年5月12日 16時00分 (5月12日 16時35分更新)

1963年にインドネシアで開かれた「新興国スポーツ大会（ガネフォ）」の水球競技に日本から出場した元選手たちが記念誌を作成し、当時の経験を後世に伝えようとしている。インドネシアが国際大会を巡る対応で国際オリンピック委員会（IOC）から加盟国の資格停止処分を受ける中で挙行された異例の大会。翌年に東京五輪を控え、参加を見送った日本の競技団体の方針に反して出場した元選手は「スポーツへの政治介入に翻弄（ほんろう）されながらも、日本のために頑張った足跡を伝えたい」と語る。（浅井弘美）

中日新聞ポッドキャスト「あしたのたね」で、元選手の出場経緯や思いなどが聞けます。



競技会場となったプールを背に記念撮影する日本の水球チームの選手ら。村上順三さんは後列右から3人目＝1963年11月、ジャカルタで撮影（村上さん提供）

ガネフォ開催のきっかけは、愛知県を主会場に来年秋に開かれるアジア競技大会の第4回大会（62年）だった。開催国インドネシアが、宗教や政治的な理由からイスラエルと台湾の参加を拒否。これを受けて加盟国資格停止処分を発したIOCにインドネシアが反発し、独自にガネフォ開催を決めた。

日本の競技団体はIOCの方針などを踏まえ、いずれも代表団を送らなかった。一方、水球のほかフェンシングや卓球、柔道など10競技の選手、監督ら96人が個人で参加し、記念誌によると、日本選手団は金メダル3個、銀メダル9個、銅メダル9個を獲得。水球は銀メダルだった。

水球競技の元選手村上順三さん（86）＝神奈川県横須賀市＝は「日本のためになる」と信じ、日本水泳連盟に脱退届を出して現地に赴いた。インドネシアを処分したIOCを批判し64年東京五輪のボイコットを示唆した国もあったといい、村上さんは「日本からガネフォへの参加がなければ東京五輪の参加国が減ったかもしれない。五輪開催の一助になったと思う」と胸を張る。



ガネフォ開会式で入場行進する日本代表の選手たち＝1963年11月、ジャカルタで（村上さん提供）



銀メダルを手にガネフォを懐かしむ村上順三さん（右）ら

村上さんは脱退届を受理されず、連盟から64年に除名処分を受けて、さまざまな大会に出場できなくなった。連盟復帰は8年後だった。

記念誌づくりは開催から半世紀となる2013年ごろ、村上さんが水球競技に参加した仲間たちに寄稿を呼びかけ始まった。元選手ら13人が当時のエピソードや帰国後の境遇などをつづり、14年に50周年記念誌を発行。その後も19年に2冊目の55周年記念誌、23年には60周年記念の3冊目が出た。



水球競技の元日本代表選手らが当時のエピソードや帰国後の境遇などをつづった記念誌。左から50周年の1冊目、55周年の2冊目、60周年の3冊目



3冊目の記念誌を手に開催当時を振り返る水球元日本代表の村上順三さん＝京都市で

日本の選手団長を務めた頭山（とうやま）立国（たちくに）さん（86）は2冊目で「インドネシアは切っても切れない日本の友好国。それを損なうことがあってはならない」と団長を引き受けた時の思いを記し「（日本オリンピック委員会の）積極的な協力を得られぬことは承知していたが、陸連ならびに水連は特に厳しいものであった」と回顧。3冊目で選手の一人は「アマチュア資格剥奪、水泳連盟からの除名等、当時は私の心の傷でしたが、それをバネにして懸命に生きた事が自分の人生のよりどころになっている」と打ち明けた。



「ガネフォへの参加は非常に大きな意義があった」と振り返る頭山立国さん＝東京都内で

ガネフォに詳しい中京大スポーツ科学部の富田幸祐講師は「1950年～60年代の国際情勢が強く影響した大会だった。記念誌には当時の選手たちの覚悟や不遇が克明に記されており、世界のスポーツ史を知る上で大きな意義を持つ」と評価する。

村上さんは「参加経験は、その後の仕事や家庭、業界で頑張る力になった」と振り返る。水球の元選手たちは年1回集まって交流を続けてきた。参加メンバーの高齢化で23年11月が最後になり、元選手2人が翌年、相次いで亡くなった。当時を知る関係者が少なくなる中、「大会に出た記憶を記録として残し、少しでも多くの人に知ってもらえたらうれしい」と話す。

各記念誌は、村上さんの母校・成城大の水泳部出身者らでつくる「成城水泳会」ホームページで閲覧できる。